

四、希望と心配

「リストをとつてくれ！」

ヴァイトさんは乱暴に言いました。

たぶん自分で思った以上に、少し乱暴な言い方だったのでしょう。レヴィーさんは、よくわからなかったようでした。

茶色い作業着を着た、この小柄で少し前かがみの老人は、壁のほうに後ずさりしました。そのまなざしは、不安でいっぱいでした。半分あいた口は、叫ぼうとしたまま固まってしまったかのようでした。



やつとのことで、レヴィーさんが手に持っていた茶色い封筒を渡すと、すぐにヴァイトさんはコートを着て、アリスに盲人腕章を持ってくるように命じ、杖で床を激しく叩きながら、作業所を出ていきました。

そのとき、ヴァイトさんは一言も口にしませんでした。くちびるをかたく閉じたまま、怒りが爆発しそうな顔つきでした。一九四二年十月に最初の連行（ナチスがユダヤ人を収容所へ連れて行ってしまふこと）が

